

平成30年 5月31日現在

機関番号：20101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26350932

研究課題名(和文) 離島社会における子どもの身体・健康・医療に関する文化的知識と行動パターン

研究課題名(英文) A cultural analysis of the relationship between children's perceptions of health, illness and medicine and related behaviors and the current medical environment in two remote Japanese islands

研究代表者

道信 良子 (Michinobu, Ryoko)

札幌医科大学・医療人育成センター・准教授

研究者番号：70336410

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本の離島で学童期の児童を対象にエスノグラフィを実施し、子どもの身体、健康、医療に関する文化的知識と行動様式について医療環境とのかかわりで調査した。知識の世代間伝達が両島ともに確認され、特に子育ての習慣が子どもの健康行動に影響していた。しかしその一方で、交通網の発達によって都市部の医療システムとの結びつきが強まっていることや、島外出身の女性を親にもつことなどによって、子どもの知識や行動様式にはゆるやかな変化が生じ、また、親の社会的位置づけが子どもの健康観や身体観にも影響を及ぼしていることが確認された。地域ぐるみの子育てを充実させ、プライマリケアを中心とする医療が島の医療環境づくりに必要である。

研究成果の概要(英文)：This study investigates how children perceive their body and health, illness and medicine, and how socio-cultural factors such as conventional health care knowledge and current medical environment have impacted their bodily knowledge and health behaviors. Ethnographic fieldwork of daily activities of school-aged children was conducted in Rishiri and Hateruma, two remote islands in Japan. The evidence suggested that there was a cross-generational transmission of knowledge of body, health and self-care among children from both islands. It specifically showed that conventional child-rearing practices had significant impact on the children's knowledge and health behaviors. Considerable cultural influence originating from areas beyond the islands was observed as well, such as cultural behaviors of mothers who came from the main island. Community-based primary health care should be strengthened with good referral services to pediatric medical care systems in cities.

研究分野：子ども学、医療人類学、グローバルヘルス、エスノグラフィ

キーワード：子ども 身体 健康 医療 自然 エスノグラフィ 人類学 公衆衛生学

## 1. 研究開始当初の背景

研究者はこれまで、文化人類学の観点から、北海道利尻島と沖縄県波照間島の学童期の子どもとその親を対象に、その身体・健康・医療に関する観念とその通時的変化を、異なる医療環境に留意しながら明らかにしてきた。

両島の共通点として、①祖父母世代では専門医療(病院や売薬)とは別に、民間療法(薬草や温水を利用した対処療法)が多用されていたのに対して、親世代では専門医療が主流になり、民間療法は補助的になるか皆無となっていた。また、②子どもの行動範囲を制限し、子どもの身体を保護の対象とする傾向が強まっているのみならず、専門医療に大きく依存するがゆえに、それが不足している離島の医療に対する親の不安が強いこと、③日々の生活の中で子どもに治療力を読み取っている親の態度が子どもの受療行動にも影響を与えていること、④子どもの身体・健康・医療をめぐる観念は、親の観念や職業の影響を受けて多様化していること、⑤耳鼻科や眼科など島内に専門医が不在の傷病を患った場合、経済的理由から島外での受診が控えられ、子どもの身体的状況に格差が生じていることが明らかになった。

研究者は、両島における身体・健康・医療に関する観念の通時的変化を明らかにする過程で上述の知見を導いてきたが、子どもの身体的状況に格差が生じ、また、祖父母世代の経験知との断絶が確認できる状況下において、種々の違いや格差が生じた要因について分析し、子どもの不利益を解消するための方策について検討することは急務である。その際に、子どもが獲得する身体・健康・医療に関する知識や行動パターンは、家族、学校、地域社会といった個々の中間集団との関わりを通して形成されること、離島と本土との関係性を背景とする離島社会の社会構造や医療環境がそれに影響を及ぼしていることを視野に入れる必要がある。

## 2. 研究の目的

そこで本研究では、日本の離島で生活する子どもたちが、自分や他者の身体・健康・医

療に関する知識と行動パターンを獲得していく過程を、子どもを取り巻く社会・文化的環境や、離島の医療環境との相関において明らかにする。子どもの知識や行動パターンの共通性を見出すとともに、その多様性や身体的状況に相違が生じる要因と結果を読み解くことで、離島特有の子どもの課題を整理し、地域の特性に応じた子どもの医療環境づくりに資する知見を得ることを目的とする。

具体的には、次の2点に焦点化する。

(1) 身体・健康・医療に関する知識や行動パターンの発達は、子どもがまわりの人々の発言や行動を観察・模倣・参照しながら成長する過程、すなわち「社会化」に位置づけられるという前提に立ち、子どもの社会化に作用する日常の関係性、それを規定する社会構造を明らかにし、子どもたちの応答をそうした文脈の中で読み解く。具体的には、家族、親族、先生、友人、医師、看護師、近所の人々など、誰との相互関係がどのように子どもたちの身体・健康・医療に関する共通のコード(食べ物は残してはいけないといった暗黙の規則等)、共有された価値、コミュニティへの帰属意識、他人との協調や自由な個といったメッセージの獲得に影響を与えているのかを考察する。そして、まわりの人々が発信する情報を自らの行動規範として、子ども自身がどう選別して身につけているのかを読み解く。同年齢、あるいは異年齢の子どもとの相互行為から生まれる知識や行動パターン、子ども内部に多様性が生まれる過程とその背景についても考察する。

(2) (1)で明らかにされた子どもの知識や行動パターンが、離島の社会構造、医療環境とどのように相関しているのかを分析する。具体的には、親を含む移住者の増加による価値観の多元化や伝統儀礼の衰退・復興等の社会構造の変化が子どもの身体に与える影響、ワンクッションコールの導入等の医療体制の変化が子どもの受療行動にもたらす作用、ひるがえって子どもの個々の反応が離島の医療環境に何らかの影響を与えているのか否かといった再帰的な側面を検討する。なお、医療環境とは、医療施設、医療設備、医療予算、医療知識及び医療技術などの医療

資源だけではなく、医療者と受療者の関係性、そこから生まれる医療の意味や言説を含む。

### 3. 研究の方法

北海道利尻島と沖縄県波照間島を調査地として、学童期の子ども(小学生児童)を対象に、平成26年度には、子どもの身体・健康・医療に関する知識と行動パターン、子どもと家族、学校、地域社会との関係性について文化人類学の調査(インタビュー、参与観察、資料収集)を通じて明らかにした。

平成27年度には、平成26年度の調査を継続しつつ、公衆衛生学の観点から、子どもが獲得する身体・健康・医療に関する知識と行動パターンを離島の社会構造と医療環境との相関で分析するために、地域の医師、保健師にインタビューを行った。利尻島では、地域の祭りやマラソン大会、スキー教室の参与観察を行い、子どもが地域でどのように育てられ、伝統文化がどのように継承されているのかを確認した。

平成28~29年度には、フォローアップ調査を行い、離島特有の子どもの課題を整理するとともに、先行研究に照らし、本研究の独自性と他の離島社会への研究知見の応用可能性を探った。平成23~25年度までの調査結果とあわせ、本研究の集大成を行い、学術雑誌で公表し、また、地域住民にわかりやすいかたちにして伝えた。

このほかに、利尻島では、写真と語りの展示会を行い、保健・医療・福祉行政に携わる職員、医師、看護師、学校の教職員、児童の保護者、地域住民等との交流会を行った。

波照間島では小学校での参与観察がかなわなかったため、4世帯の子どもと保護者、小学校長と養護教諭、診療所医師、歯科医師、保健師へのインタビューを行った。インタビューで得たデータから、子どもの身体・健康に関する特徴を抽出し、それと親や祖父母、地域社会が有する身体・健康・医療に関する知識や行動パターンとの相関を考察した。

利尻島では子どもの視線に立ちその生活環境を包括的に捉えることに留意した調査が行われたが、波照間島では単発的なインタビュー調査しか行うことができなかった

ため、データの質が異なっていることを予め断っておく。

### 4. 研究成果

(1) 子どもの身体・健康・医療に関する知識と行動パターン

[利尻島]

利尻島においては、子どもの親世代(20~40代)との類似性が見られたが、祖父母世代(60~80代)との断絶が見られた。すなわち、祖父母世代と親世代のあいだに知識や行動の変化が起こる要因があったと推測される。ただし、通常、身体・健康・医療に関する知識と行動はゆるやかに変化すると仮定すれば、祖父母、親、子どもという三世代で徐々に起こった変化が、祖父母と子どもを比較した時に断絶しているかのように見えるという解釈も可能である。

具体的には、祖父母世代は内陸との交通がいまほど便利ではなかった時代に生まれ、いかに島で生きるかということを探り、島の自然環境に対する深い知識を発達させている。風、波、雲、光をもとに漁に出る日を決め、礼文、利尻、稚内の三地点からどれほど離れたところに船をとめれば獲物を捕らえられるかを知っていた。山では、食べられる植物、かゆみやかぶれを起こす植物、傷口に塗布すれば出血を止める効用をもつ植物などを見分けることができた。食べられる植物のいくつかはおやつがわりに食べていたという。

親世代になると、空路や海路が充実し、札幌や稚内からさまざまな物資が島内に入り、簡単に入手できるようになった。最新鋭の調査機器を備えた漁船で漁が行われるようになると、自然を読み、海を読む知識と行動が急速に失われていった。子どもの世代には漁業に就くものも少なく、生業にかんする祖父母世代の身体知・経験知を引き継ぐ機会はほとんどない。かつての病気治療には家庭配置薬や売薬が使われていたが、現代の子どもたちは、病院や診療所で手当てを受けることが通常である。

しかし、その一方で、祖父母と子ども世代に共通する知識と行動パターンが、土地との

かかわりのなかに見られた。子どもの日常をよく見てみると、山の麓や海岸を遊び場にして、山の生きもの、海の生きものに関心をもっている。祖父母に連れられて山に通ううちに数種類の野鳥の鳴き声を聞き分ける感覚(聴覚)が発達したという子どもがいた。

ほかにも、家から徒歩圏にある海岸沿いの公園で、その海岸に流れ着いたアザラシを小さい頃から見て育ち、そのアザラシとのかかわりがもっとも大切な時間であるという子どももいた。野鳥を保護する小学生の姿もあった。このような行動は、豊かな自然にかこまれた環境で自然に育つとも考えられるが、その自然に対峙する姿勢は文化的産物であり、祖父母の世代から綿々と引き継がれているものであるといえる。

同年齢、あるいは異年齢の子どもとの相互行為から生まれる知識や行動パターン、子ども内部に多様性が生まれる過程とその背景については、祖父母・親世代と比較すると子どもの数が少なく、家族、親族、先生、医師、看護師、近所の人々など、ひとりの子どもに対する大人からの干渉が大きくなっている。その結果、子ども集団に均質性が見られ、その多様性はほとんど認められなかった。家族の経済状況にも都市部のような目立った格差はなく、全員が同じように小学校、中学校、高校にあがり、大人の目がよく行き届く環境のなかで生活していた。

#### [波照間島]

波照間島の子どもの身体的特徴として、齲歯率の高さが挙げられる。平成 29 年 4 月時に 48.5%が虫歯を保持しており、平成 23 年度 (35.7%) よりも上昇している。とりわけ 2,3 年生の齲歯率が高いが、ここ数年は 1 年生の 3 割に虫歯がある。学校側は食生活の問題というよりも、夜仕上げ磨きを親が行っていないこと、保護者の歯の健康への認識の低さを直接的原因として認識していた。

虫歯の治療率の低さも特徴的である。平成 30 年 3 月 (平成 29 年度最終月) でも治療率は 69%であった。島には平成 26 年 9 月に町立の歯科診療所が開業し、歯科医師が駐在しているものの、石垣島まで出向いて治療を受け

た子が多かった。こうした状況は、親を含む地域住民と医師との関係性に起因している。同島では医師であれ地域に溶け込むことや、住民の生活や考えを理解した応対が期待されるが、医師がそうした態度を積極的に示さないと住民は受診を控える。このことから、親世代及び祖父母世代が共有する島居住者に要請する行動パターンの存在が、子どもの歯の治療率に影響を与えているといえる。

波照間島においては、子どもがいる 32 世帯のうち祖父母が島に居住しているのは 16 世帯にとどまる。母親は本土出身者が多勢を占めるが、両親共に本土出身者の子もいる。そうした子には他の子のインタビューでは出てこなかった話、例えば年少の時に海にもぐれるようになった話や、6 歳頃から低気圧の時に頭痛薬を飲むといった話がなされた。親の側も親族不在という環境下では、親が仲良くすること、親の心の平和が子どもの健康に繋がると語り、親の社会的位置づけが子どもの健康観や身体観にも影響を及ぼしていることが示唆される。

インタビューした母親はいずれも島外出身者で島の子育て環境を高く評価している一方で、島では子どもが経験できる範囲が狭いと、定期的に本土や沖縄に子どもを連れて行っている。また、学力面での心配の他、同級生が幼少の頃から限られたメンバーで成長するので、中学生になり自我が出てきた時に自分らしさを発揮しにくいと指摘する。親は個性の発揮や自信の獲得といった子どもの将来的な姿を見据えており、この点は子ども自身の身体や健康に関する知識や行動パターンとは異なっている。

#### (2) 離島特有の子どもの課題

両島において、小児医療を専門とする医師の不在があげられる。しかし、利尻島に関しては、本土との交通網が発達しているため、札幌、旭川、稚内で専門医による医療を受ける機会は十分にあり、本土との医療格差は他の離島ほどには見られない。親世代には小児医療を専門とする医師がいないことに対する不満があるものの、都市医療との結びつきが強いために、北海道の他の地域や日本の他

の離島よりも恵まれた環境にあるといえる。

波照間島では、離島医療の問題点として、専門医の不在とワンクッションコールが挙げられた。医師との距離の近さを活かさない状況が親の不安を増長させている。他方、診療所は信頼を寄せられ積極的に利用されていた。島在住の看護師が長く勤務し住民を熟知し医師と情報共有を行っていることが信頼に結びついていた。このことから住民と医師とを媒介する仲介者の役割の重要性が指摘できる。

利尻島、波照間島それぞれの地域の特性に応じた子育てと子どもの医療環境に関しては、豊かな自然のなかでの地域ぐるみの子育てを充実させ、子どものこころとからだの発達をサポートするとともに、プライマリケアを中心とする医療を展開し、専門医療が必要な場合には都市部に遅延なく紹介できる仕組みを一層充実させることであるとする。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

- ① 道信良子: 島の子どものウェルビーイング. 発達心理学研究 28(4): 202-209, 2017-12 (査読有)
- ② Michinobu R: The wellbeing of children and the community: Interactions between children and the natural environment on a remote Japanese island. 15th Congress of the International Society of Ethno-biology, Makerere University, Kampala Uganda, 2016, 8, Proceedings in press. (査読有)
- ③ 道信良子: 健康と医療の人類学. 看護研究 49(7):552-556, 2016
- ④ 道信良子: 医学教育における人類学の進展—事例シナリオ活用の利点と方法 日本保健医療行動科学雑誌 30(1): 16-21, 2015
- ⑤ 道信良子: フィールドで育む共通感覚—日本の医学教育において人文・社会科学の視点を育成するための方法. 医学教育. 46(4): 322-328, 2015 (査読有)
- ⑥ 加賀谷真梨: 書評 安井真奈美『出産環

境の民俗学—第三次お産革命にむけて』、日本民俗学 293: 127-132. 2018

〔学会発表〕(計10件)

- ① Michinobu R: The wellbeing of children and the community: Interactions between children and the natural environment on a remote Japanese island. 15th Congress of the International Society of Ethno-biology, Makerere University, Kampala Uganda, 2016, 8 (査読有)
- ② 道信良子: 看護研究におけるヘルス・エスノグラフィー看護の実践と教育への展望. 文化看護学会第8回学術集会特別講演, 千葉市, 2016, 5
- ③ 道信良子: 北の島で育つ. 日本発達心理学会第27回大会編集委員会企画シンポジウム「非定型」の視座から発達進化研究のフレームワークを再考する, 札幌市, 2016, 4
- ④ 道信良子: 医学教育における医療人類学—ヘルスサイエンスとしての視点と方法. 第59回医学教育セミナーとワークショップ, 岐阜市, 2016, 1
- ⑤ 道信良子: 医療、福祉、文化と子ども. 平成27年度第2期えるのす連続講座女性大学, 札幌市, 2015, 9
- ⑥ 道信良子: 身体を知る・病気を診る—医療人類学の視点から. 北海道家庭医療学センター講演会, 札幌市, 2015, 3
- ⑦ Michinobu R: Beyond Narrative—An Autistic Child's Bodily Representation of His Life. 7th International Conference of Health Behavioral Science, London, United Kingdom, 2014, 9. (査読有)
- ⑧ 道信良子: こどものいのちと対話する手法. 日本文化人類学会第48回研究大会 分科会での趣旨説明. 広島, 2014, 5
- ⑨ 加賀谷真梨: 老いに向き合う人々—高齢者ケアにみる沖縄社会. 明治大学島嶼文化研究所設立記念フォーラム『国際社会の中の沖縄奄美』、明治大学、2017. 4. 29

- ⑩ Kagaya M: Family and "family-like" people: conflicts over community-based elderly care. IUAES2014 with JASCA, Makuhari Messe, Japan, 2014. 5

〔図書〕(計7件)

- ① 道信良子: 文化的背景 『講義と演習で学ぶ保健医療行動科学』日本保健医療行動科学会編 2017, 3, pp. 22-23.
- ② 道信良子編著: 『いのちはどう生まれ、育つのか』岩波ジュニア新書, 東京, 2015 (総ページ数 172)
- ③ 加賀谷真梨: ジュディス・バトラー 『はじめて学ぶ文化人類学 人物・古典・名著からの誘い』岸上伸啓編著、ミネルヴァ書房、2018. 4、pp. 233-238
- ④ 加賀谷真梨: 高齢者福祉と家族、高齢者のセクシュアリティ、家族介護者への支援活動、高齢者福祉の地域差 『現代家族ペディア』比較家族史学会編、弘文堂、2015. 11. pp. 204-206、p. 208, p. 210
- ⑤ 加賀谷真梨: 子どもも親もみんなで育てる 『いのちはどう生まれ、育つのかー医療、福祉、文化と子ども』道信良子編著、岩波ジュニア新書、2015. 3、 pp95-106
- ⑥ 加賀谷真梨: 性差と働き 『民俗学辞典』民俗学事典編集委員会編集、丸善、2014. 12、pp. 62-63
- ⑦ 加賀谷真梨: 第5章 ジェンダー視角の民俗誌一個と社会の関係を問い直す『<人>に向きあう民俗学』門田岳久、室井康成編著、森話社、2014. 6、pp. 156-187

〔その他〕(計8件)

- ① 道信良子: 島のいのちの始まり「子どもの健康と医療ーフィールドワークを通して見えてきたこと」北海道医療新聞 2015, 5, 29
- ② 道信良子: 病気になるということ「子どもの健康と医療ーフィールドワークを通して見えてきたこと」北海道医療新聞 2015, 6, 12
- ③ 道信良子: 島の医療に望むこと「子どもの健康と医療ーフィールドワークを通

して見えてきたこと」北海道医療新聞 2015, 6, 26

- ④ 加賀谷真梨: 南の島のこどもたちが病气やけがをする時「子どもの健康と医療ーフィールドワークを通して見えてきたこと」北海道医療新聞 2015. 6. 5
- ⑤ 加賀谷真梨: 本土出身の母親とその子どもたち「子どもの健康と医療ーフィールドワークを通して見えてきたこと」北海道医療新聞 2015. 6. 19
- ⑥ 加賀谷真梨: 島の将来を担うこどもたち「子どもの健康と医療ーフィールドワークを通して見えてきたこと」北海道医療新聞 2015. 7. 10

研究代表者ホームページ

<http://michinor.com/results.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

道信 良子 (MICHINOBU, Ryoko)  
札幌医科大学・医療人育成センター  
・准教授  
研究者番号: 70336410

### (2) 研究分担者

加賀谷 真梨 (KAGAYA, Mari)  
新潟大学・人文学部人文学科・准教授  
研究者番号: 50432042

### (3) 連携研究者

大西 真由美 (OHNISHI, Mayumi)  
長崎大学・医歯(薬)学総合研究科・教授  
研究者番号: 60315687

### (4) 研究協力者

西谷 榮治 (NISHIYA, Eiji)  
元利尻町教育委員会・利尻町立博物館学芸員

奈良美弥子 (NARA, Miyako)  
札幌医科大学・写真作家